18

尤永諸家譜

清和源氏乙五冊之内
義家流之内足利流

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (18)
函號 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

板倉
花房
荒川

寛永諸家系圖傳

清和源氏
義家流
足利流
板倉

乙五

浅草文庫

泰氏（やとうぢ）

足利宮内少輔（くないのせう）

義顕

板倉次郎　渋川小浦次郎

毋ハ小条殿時貞むすめ

義春

渋川次郎三郎

毋ハ小条為時むすめ

貞頼

長三郎　兵部大輔

毋ハ小条時廣むすめ

義季

渋川又三郎　刑部大輔　従五位下

建武二年七月相模次郎小条時行謀叛を

起し　五百騎と門わき遠倉とせんとて

信州より出法と義季小山判官秀朝と同
じく武州ふく見とをぐぐいとも合戦
利なきゆへ同月二十七日義季同國女郎
原よりかへり自害秀朝も又自殺を

直頼

中務太輔

義行

左兵衛佐

満頼

義竟

左近将監

左衛門佐 此時後二三代中務欠

頼重

板倉八右衛門

落清屋

冬ゝ別額田郡小義村より住を

好重

八右衛門尉

松平大炊助好京より屬を

永禄四年四月十六日西条河東条の城をと
同西長尾小太郎と合戦の時好京と同条よ
て討死　四十二歳　法名源立

忠重

本工右衛門尉

東照大権現遠別言天神の孫とせあ給ふとき
忠重もゝんで堵色よりたちまち敵の
ゝひ武者よあふその者城の中にらて

へゝと忠重をいうけゝ城のうちて見とら
ゝる

大権現遠別小山の孫とせあたまふ時忠重松平
大炊助家忠よまゝひゝ先陣よりて
首一級を得ゝら
天正十二年長久手合戦の時酒井左衛門尉
松平大炊助ゝ紀州ふゝ士卒五十騎と
ゝゝゝひゝに敵軍の陣とゝゝむ
忠重其中よりて敵と兵とおさめて

伊賀よりおもんで忠重ちうしゅうして味方
勝俗かつぞくに引とれ
寛永二年三月朔日病死　八十三歳
法名一雲

勝重

板倉四郎右衛門　伊賀守
神ハ渋川と称号とを始め板倉とあらたむ
幼少の時剃髪して僧となれ倉平宗重
遠別言天神ふり戦死の後

大将軍の命により還俗して
大将軍より駿府のまちをまもるる
大将軍関東八州と領じ給ふ時江戸の町
奉行となれ
関東合戦ニ始天下一統の時
大将軍の仰ふり京都の雪代となれ
文長八年法ニ位下ゟ叙し　伊賀守と
号ス
同十九年大坂陣の時　御入洛以前先ゟ

の人数大坂よりおせと勝重陣場とゆき
して見とゝけ申けゝ此時信義入の八木
六万石大坂よりゝ勝重使者二人と大坂よ
りゝ大野治理御用をゝよりひきゝ
大坂不叶の事ゝあるにより今合戦よ
ゝ及ぶ和也信義入の八木六万石と北ゝ
ゝ籠城の用ゝとして見とゝけんとせば
ゝ籠城ゝすべしゝ合戦ハ見と指をく
ゝ者さよゝどゝ申へとゝ治理をゝ

ゝ事ゝ城中ゝ糧米おゝたくゝ申むの石
仲ゝの八木ゝ共申へとゝ見ゝ者しとゝ
勝重ゝ不の紅頭とゝ奉行ゝ
ゝて見を運送せゝむゝ早川ゝ
ゝゝりて大坂ゝ付ゝ法者の長士当
見とゝ申きゝりとゝむ勝重見ときゝ龍脚
と治理をゝよりていひきゝハゝ
物ゝ見とゝ申ゝ和議ゝ見といゝども
城中ゝ兵糧のたゝりゝと思ゝ見とゝ

定重

年屋敷修理亮宗陳中より先代と
なんとかハあるべきとおりの書状と川口の惣代
より勝重ゟ義勝に状を新宮早川
はよりの書の先より先代をたのみて五万石乃
長根事有之候状見よう先代
元和九年法四位下に叙し伯耆守と
寛永元年四月二十九日京都ゟ年
年八十　道号樂山　法名源英

義花

松平右京亮家忠より屬
大将提遠州言天神の塚をせあたまふ付定重
先陣よりをんで塚下まで戦死二十八歳
法名知白

重宗

周防守
寛長十年法印位下より叙

元和六年父勝重駿府の後京都の所司代
ゆゑなり
同九年従四位下に叙し伯耆に任ず

重昌

内膳正
寛永十年従五位下に叙す
寛永十六年正月朔日 上使として肥前國
島原に切りむき討死

重能

主水佑
寛永十一年十二月従五位下に叙す

重直

甚左衛門

女子

小笠原左馬佐政信が妻

重大

東市正

寛永十二年　石出されて逐電となって

御暇者となる

同十三年十二月二十八日御切米拾領を

同十六年十二月従六位下に叙せ

同十九年三月十二日知行五石をたまわり

て御かり扶頭となる

女子

女子

戸田主殿頭政が妻

女子

河村長次郎重久が妻

女子

酒井左衛尉直政が妻

重卿

阿波守

寛永十三年十二月従六位下に叙せ

重政

次郎右衛門尉

女子　女子　女子　女子　女子

女子　女子　女子　女子　女子

女子　女子　女子　女子　女子

内藤百助正勝が妻

森川求泳重政が妻

松平丹波守光重が妻

内藤飛騨守忠政が妻

松平甲斐守輝綱が妻

家紋左巴三頭（いへのもんひだりともえのみつがしら）

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

花房

尾驛守職直ひとり林氏となりて

称号しとと

泰氏

足利宮内大輔　母ハ武蔵守平春時がむすめ

義韓

上野津師

泰氏の八男

貞遠

同三郎

頼遠

同太郎

職通

花房太郎　常陸國花房より住して

はじめて花房と号す

正和五年六月二十二日卒す

通治

同太郎　母八平時則がむすめ

正安元年八月三日卒す

教信

同六郎　母八上野

法名国清

女子

母同前

職兼

同太郎大夫

頼治

同孫三郎

頼重

右馬亟

兼治

刑部少輔

頼泰

二郎

職重

久岳清府

直重

常刀

職定

太郎右清門府

国立公文書館
National Archives of Japan

宣勝

十郎左衛門尉

職忠

因幡守

忠邦

治部左衛門尉

職治

五郎左衛門尉

正宣

六郎兵衛尉　大學頭　生國伯耆

女子

正幸

又左衛門　越後守　生國播磨

御用任長の世よりて信濃国長龍の

附正幸伯耆の国より海路をへて上

海を播磨室の津小豆島よりおめて
海賊船あまたの船よりのりひ
きてうちとめんとす正章大腹股の矢
にて賊徒の先ゝげと射ころし其首
を得うり賊徒等利とうちひまく
四郎が弓路の紅と國どうを矢ゝ
四郎が名をときざむ也後日よ賊徒共
矢をとゝくふ
文長十年六月二十二日死を八十二歳

正成

志摩守　法名道快　生國同前
播磨三木の城主別所小三郎長治
信長よりもつ時秀吉正成と長治が
もとへ使をして長治と信長と
和睦せむ
宮表為和泉守直家信長よ屬せん

事をうる小西摂津守をうばひ正成こ
きとくかりて其ふせぎをし給ふと
組列三文落城の時正成先をひよせて
しで首級を得ようり
秀吉藝州毛利氏と征罰のため緒軍
囲る松の城よりうて陣とりり不
日に攻落してをるゝる松の城と
正成よたまりり六千石のか増ありて
八千石と領を其後又伯耆の国にて

一万石の加増をたまりり其ふせぎ
の事也一万三千石加合三万千石と領を
襲樂紀伊の時秀吉の命よりて
城を治下に報し紀列の先鋒よく
りれ時りり三十四歳
文禄元年秀吉朝鮮征罰の時正成
宇喜多秀家に属して渡海し漢南
人をうちとれ正成ゝ敵を
首級を得りり又朝鮮の切岩晋州

南門の三塚よりおわくみもこの歌とう
切字として成とかくべしふ
寛長六年正成宇喜多中納言秀家
の勅氣とかくうりて其家とたちされ
東照大将現増田右衛門尉長盛よりこと為と
為ことを給いて正成と長盛が領地よ
りめたまふ石田治部少輔三成
謀叛とくいふ長盛三成と同され
よ正成長盛が領地をうりて高野山よ

のがれ関が原合戦為石三成伏誅のな
大将現正成とめしされ領中の国猛勇
の花して六千石をたまわれ
寛長十九年大坂陣の時正成うべよ
子幸次正盛供奉いて領茶湯よい
ちり仁和寺切腹よ出張して歌兵と
遊ちりぶけつかよ領お湯とされ
元和九年二月八日死を六十九歳
法名宗牧

幸次

志摩守　法名法下　生國伯耆

寛長八年

大指現と称したてまつる

大阪淀川より法華とつゝみ茂塚の時

よりのびて幸次紀州まさきだらて

諸中より世あ入とゝいゝども すでに茂塚に

首級を得ど

大指現蕚師の娘

白洲院殿法名まそてまつれ

寛永三年

白洲院殿の御ゝより

将軍家へ法名そまつり法度書とゝり

法名法下より叙せられ

同八年伊勢國山田のゝりとなれ

同十年伊勢玉波倉郡にて三千石の

御加増をたまりかの國中の私大名

とかれ
同十八年四月十二日死を六十歳

幸昌
弥三郎　生国武蔵
寛永十八年七月四日父幸次の遺跡
をたまはり六千石を領ず

正盛

南右衛門尉　生国備前
慶長四年豊臣秀頼より使ひ
年も色どりてさそきふ
同十九年
台徳院殿と称し
元和元年六月七日大坂陣の時紀伊
より先たちて城中へ攻入せ
り為城地を賜ず
大坂為后の様は伏見の城よりたのそて戦

功の申しをたづさへる旨付正盛がこころざ
しと感状ありて黄金をたまはる
寛永三年
台徳院殿の御位をうけて御使番をつとめ
同八年上総国内にて采地千石をた
まはる
台徳院殿薨御の後
将軍家に仕へ奉る
同十年御月番の役をうけたまはる

正盛

為長清蔵
寛永七年
台徳院殿に御目見をなす
同九年
将軍家に仕へ奉る武蔵国にて知行を給ふ

生田武義

正栄

右馬助　生田伯耆

右御院殿より御ゝ手そまつれ
寿永十九年大坂御陣より御手の
ときさき山伯耆守忠後組より屬を
元和元年六月七日天王寺表にた
わて御ゝ軍功とをげまとよろ
伏見あて其功の賞労をたゞさるの
時御感義として英令をたまはれ
ゝ侯江戸にて白其を飛とろを
御ゝあらすする事と感じたまひく

上野国にて千石の地を給ひ
寛永九年
将軍家の御ゝ使者となれ
同十年千石の御加増をたまはる
同十六年十月四日死を四十六歳
法名常和

宗勝

又七郎　生国武蔵

寛永九年
将軍家を祈りたてまつる御十二家
同十三年御番をつとむ
同十六年父正家が跡を継ぎ
一千石を給ぶ

正信

助正　生国摂州
元和四年
将軍家を祈りたてまつる

寛永九年上総国にて知行を給ぶ

職勝
重長
職澄
かな清府
職之
助長清

永禄八年細川院庄神指合戦の時獄之
敵とおくんで首級を得ら
同九年細川尊氏巣篠塚の時城を江美
次郎なるべし敵一人とらるる
同年伯耆国日幡八郎左衛門
毛利大軍といてこれと
せむ八郎左衛門加勢と字義多直家
こふ直家家臣二人に命じて先まお
もむくべきと式部ども家臣等を

あやうきとりけて諸手ゆく獄之おも
むん事をこふ直家これをゆるすか
ら獄之こよいうて共城をもりう
毛利つわる云をしてさる直家こを勇
と感じて伯耆国中を利山に登波利
のこケ所をたまりわれ
同十年伯耆南条合戦の時獄之小加茂
弾正と徒とあうとこを抜軍功あり
同年伯耆国松川の陣を せしの時獄之

之げとなれ
同十二年 鐵之武略をもつて 備前國伊部
の城を日笠源左と討捕
同年 備中國吉田合戦の時 鐵之毛利が
兵穂田弓四郎と一番に港と合戦
元亀元年 鐵之数度の軍功をよろ
抽別 法軍の以となりて 荒神山の城
ときついてこれを落
同二年 抽別 肥田左馬助こる 籠城之家

篠山の城をもつて 鐵之これを攻落して
肥田こる 籠城
同三年 小早川隆景 抽別 佐賀山の城
を守れ 鐵之これを攻落して 歌あり
うらとふ
天正元年 同吉草苅氏 硫黄山 飛弾木
の三ケ城を 鐵之これを攻落して 家
人よこ城をもらしむ
同三年 鐵之 同吉久田西屋の城を 攻落

して城守となる

同六年直家播州竜野より出張のとき

赤松左兵衛尉陣と沼山より攻る

これとうして敵あまたこうとれ赤松

が兵とくを敗走

義治国とこいつよりけて共一とを直家

たりつを二とを毛利右馬以輝元を配す

敵之有るの城と攻落して共後人と味

方に属せしめて国中平均なり

同八年の兵直家を婿男宇喜多八郎

秀家後に中納言に任ぜ出張と行ぐれり

りて敵之秀家に属と

同十一年毛利が兵大軍を以て沖播の

城をたてざりれゆく敵之加勢と秀家

よりつ大兵を以て攻落を見りり

さき敵之所城に居もり対敵兵表中よと

をひきるとこども敵之ぐ兵粮渡又市郎

表対の先ぐけ與津市郎と討播所敵初

とうをひく〳〵ひき退く秀家又市郎が若
年にして歌の將とうらやまれ事と称ず
て感状と又一郎に授く
文禄元年高麗陣の時漢南人あまた
うりとれ秀吉こち軍功と感ぜ其のう
秀吉の命によりて秀家の家老とうり
て活事をはらさどれ黒田如水うけた
まりゐて清正をたまりれ
朝鮮より帰の後石田三成なりびよ
秀家の家人長紀伊守小瀬久と秀家
より後ろ盾の人秀家小瀬久と死罷よ
ちんとと拙きども秀吉よつげどして
うれとおこうるゆあるさはざれよう三成
又秀吉ようりたふ秀吉これをあられい
たまひく其死罷とあざりて我瀬久と
あづうべしとれうるひく同三年秀吉
伏行義宣よ瀬久とあづけく常陸國
りおりしうしむ武別とられは

東照大権現秀吉の御之とりあれ事と
きこしめして御之が男子二人と江戸よりて
めとゝ爲さのもの　約命より御直九条
小なりしと武別池とよすてたゝ
文長元年上杉景勝謀叛の時
大権現下野国小山より陣を法たまふとき
御之と小山よりて飛脚を則　作とう
けたまりて御使として作所よりむ
き人質とおさしむ

同年石田三成上方にて謀叛とくいら
宇喜多秀家これよくみと
大権現御上洛より御之御先まへ夜向
を三成伏弾の板御之御使ゝして
関東より備前国よりむさ岩山の城
どうけとりて秀家領国の事とゝ
同年備中の内よりおゝく高松とたまり
同十九年大坂陣の時野田福島よせめ
りて仙波より陣とゝれ

元和元年大坂再亂の時八疾よりて
出陣せず
同三年二月十一日死す　六十九歳
法名道惠

勝元
与兵衛

職則
次郎左衛門尉

慶長五年江戸よりおくり
大坂現とゝ為し　之てまつり
同年職之後前國よりゆきて　長山の條
とうけとる　職則同紀伊
同十九年大坂陣の時職則のぐみふて
彰家より陣を十二月二十九日彰家より
野田福島より示りて　平野よりおくり
首級を
台德院殿より賜ひけ　是と感じたまふ

十二月二日仙波より陣をとられ
元和元年大坂乱の時職則尼崎の陣
番をつとむ六月七日落城の時尼崎より
ちうち出てあまたの敵を打とられ
大将秀忠卿の坂駿府より江戸へいらせて
台徳院殿より法名をたまはれ
同六年十一月二十七日死去 四十一歳
法名玄長

職利

左衛門尉
元和六年十二月十三歳にして始て
台徳院殿を拝し奉りたまはれ
父職則死して跡家督を継ぐ
台徳院殿薨御の後
将軍家より法名をたまはれ

職政

平左衛門

寛永十三癸子月始て

将軍家より仕へ奉りて

職直

林原左衛門作　　飛騨守

寛長元年林原式部大輔康政より

つぎ〳〵そだて

大指揮とあり仕へ奉りて時　　約命より

范房とあり　たゞ林原と称せ十一果

同三年

石燕院殿より仕へ奉られ

同六年上杉景勝謀叛の時

石燕院殿奥別へ浦殿向ゆへ職直作奉よ

別て称号より石田三成乱とおこせり

より職之職直

石燕院殿より仕へ奉りて大坂よ

いたる

同十九年の冬大坂陣の時供奉いたし

十一月二十九日職之職則野田福島を

せめとる聖日

右西院殿の命より職直ち地とせられ

元和元年大坂落城の別紙中よりさき

だちて城中へせめ入とゝ雖も敵とて

よ敗北ゆへ軍功をなさず

寛永九年

将軍家の命より伝奏より仰付る

同十一年より十四年まで職直

上使として長崎より向ひ吳国の高札

邪蘇禁制の事を沙汰

同年十一月肥前唐津へ邪蘇一揆と

おこる時板倉内膳正重昌石見十郎貞清

御罰の御使となりて唐津より長崎

へ発向と長崎

ハ元来邪蘇の輩大なる地なり其邪徒

よくみせん事とおりんぞかりて職直長濱
におりしさてこれと制せんとのぐこふ
別沛許容ありて作あり長濱の
法民り一揆よくこもりのあるハ立花
左近将監宗馬玄蕃頭が兵をいてこれと
泥戦をぐーとの
て職直江戸と發せけよ嬬子左衛門佐
職信はよ十七歳職直よつげどして十一月
十五日さきだちて江戸と發せ職直も

又同日よ江戸と出て尾別熟田して職信
よゆきあひてこれより父子おさにせ
向ふ十二月二日長濱よいこれはよ鴻原の
一揆いよ〳〵蜂起して天草これよみを
発といへども長濱ハかゝて共法と林ぶど
ふゆ一揆よ恵どれのこれ立花
左近将監宗馬玄蕃頭こと兵とうけて
長濱と警固せ職直ゑ職信鴻原う
おりし一揆すでこまる馬原の城よて

だりて翌正月元日備後信濃も松倉
長門守立花左右を相盟ず馬兵部少輔と
鄰合て三万餘ゝて京の城をせむとゝ
も利を失ひして疲とかゝり討死多
ものゝ多くぐに相ぬ板倉内膳正討死
石見十郎疲とゝふれ四月六日上使
松平伊豆守信綱戸田左門氏鉄沸横
田井上筑後守政重有馬の原より到
着ゝ法方より弛あつまれ兵士

十万餘同月六日より二月二十七日まゝ
まて仕寄行楽とつけてこれをせむゝ
いへどもつゝのよろ利を得ずこれよりて
上使法軍よ志めていゝ法年和
ゝ心を同くし力をあせてこれをせむ
ゝ二十八日とゝ以てこれを攻ゝ城直
と備後信濃守勝茂ゝ加へよをきて共
兵を下知せしむ二十七日職信傑乃
兵のゝ出んとゝ出ありさまとゝ

一番ゝ城中へ京こみ塀とこて付家へあつ
ひいらゝ死し又ゝ底とかゝゝりのたゝ
職直又つゞひてゝ在へ渭治が兵とさ
まゝく士卒又死し底でりのたゝし
城中三万餘の兵命とあまぞ在ざ
勢ふ死りといどゝも職直父ゝるゝびゝあ
人生とわとれ死とかゝんゝて歌あまゝ
と討とふゆゝ一揆つゝり敗走ゝ職直
りゝ京てさし死とゝりて法ゝの軍場

とまゝさ城中の家とやゝて火のゝと
あげ法軍ゝあゝ法軍ゝり煙とゝ
て回付ゝ城中ゝせあへ翌日とゝゝ
弟信とゝりゝ城とほゝれあ上使職直
父ゝが約とゝじひてゝ城ゝきだちて城
ゝ入事といれゝあ上使江戸ゝ参り
て職直父ゝが軍法ゝゝも事と言上と
将軍家御氣色ゝて渭治
らびゝ職直とゝ六月十九日江戸

よりてこれを奉行所よりおのおのて二日会議
ありといへども職直が申す始終一なり
同月二十九日井伊掃部頭直孝と井大炊助
利勝堀田加賀守正盛ホ酒井濃州忠勝
が宅より書して
約命と鴻恩信濃
よつげていはく右清門佐一番より城ホのり
こもうへ職直下知とくふといへども信濃も
多勝して思意ありべきのよし法軍より
志めしあるをもつて城中にせめ入ちつみ

あるを志げ〳〵出仕をやむべしと又職直より
つげていはく歌城中と出ざりけるより
職直父子ともに和とまるべきて法軍より
乞だち城中へせめ入軍法をそむく乃
糸其罷をおりぬ門戸とらづて籠
居をべしと七月朔日法国の大小名出仕
の付殿中へおのおの執事ハ老中 約令
乃紙とのべて勝義ハ職直職信が
罷の理をと法人をしむ職直御

勅氣とかゝわりとゝへども　詔命のむね
ひさしく伝へたてまつれ
同年拾月二十九日勝義卿敕免のゝち
同十七年六月十一日阿部対馬守重次宅
よりて老中　詔命の旨をつげて
ゝゝ一ゝんを罷をおこなはるゝといへども
東照大権現二十六年きよあるゝ共ゝ軍
功あるゆへを罷をゆるさるゝと職直をこ
ろ病よりおもきといへども父子おなじく重次

職信

詔命のかゝしけなき
を以ゝりて
事を為を同月十三日職信卒ス城を職直
を疾のいゆるを待て七月三日卒ス城を

左衛門佐
寛永四年七歳にして
台徳院殿ゝ御
同八年

将軍家と為し奉そまつる
四十四年酒原郡蘇蜂起の時之陣よ
り見一番よ塀中よせめ入る事ハ職直が
働中よ見てとり

職負

左馬助

寛永十三年

将軍家と為し奉そまつる時よ十三歳

家紋三角合

職直ハ榊原と称するよりて車の
紋とする

国立公文書館
National Archives of Japan

荒河

重綱

小右衛門　生國尾州

佐久右衛門信盛ヨ屬ス尾州ヨリ出ル

たゝかひ死ス　法名義居

重世

童名竹　長兵衛

幼少の時小姓となり織田常吉よりたくて
尾張井口と知行を
東照大權現関東御入国以おゝ出されし
武州の内よりたわて領地を給ふ
寛永長四年
台徳院殿と申し奉て大御番の組

頭をおほせつけられ其時上総下総安国
の内よりたわて加増乃領地を為領を
同十四年　治命により城州伏見城
御番をつとし其御慶義として
台徳院殿武州の内よりおわて領地を加増し
たまふ都合八百石の領地を
同十九年大坂御陣の時伏見城御番を
つとし時　治命ふり大和よりおもむき
御義をあつため落城以後大坂へくふ

元和六年六月八日病死　五十六歳

重勝

長兵衛尉　生国武州

右近院殿へ仕へ奉る

重政

七兵衛尉　生国同所

元和四年九月十日

将軍家へ仕へ奉る

重照

勝十郎　生国同所

元和九年十一月八日

将軍家へ仕へ奉る

寛永六年

頭となる

約命にしたがひて小十人組

重頼

右兵衛

寛永九年八月二十三日

将軍家へ献ぜられ

重正

一万千代　生国武州

領地八百五十條石

家紋割鷹羽

荒河

某

生國尾州

忠吉清

関白秀吉より使番となる

忠吉

又六郎

生國同前

大指揮へはくへくてきつれ
天正十八年小田原陣の時付奉
同十九年奥州陣より付奉
文禄元年高麗陣乃時
大指揮よりきびしくてきつり肥前名護屋より
いつれもこれなし
右御陣へはくへくてきつる
慶長五年大田陣より付奉
大坂御度の陣の付奉一所旗本より
ゑあい鉄炮のあしかるをもつて後を
をとなれ
元和元年六月七日の御合戦乃時
約命よりて忠右鉄炮足軽と引分て
川とこへ二町かと出法一下知をもて
といへどもあいまゐ鉄炮ゆへ
つき七井大炊頭利勝久世三四郎坂部
三十郎等よりて先陣よすと
歟の前一ツ討捕右の三人よりこと

り其首を捨て又先陣よすむ
寛永六年四月二十一日六十二歳にて死を
法名若照

右元

又六郎　生國武州

元和六年

右御院殿を先してまつりごと

将軍家へ仕へ奉そまつる

家紋丸の内よ割鶴羽

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan